



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 —

信じる自由

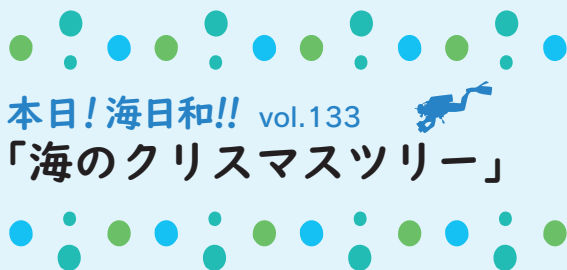
10月の終わりに緊急事態宣言が明け、飲食店がにぎわい、街にも人が溢れだした。それでもまだ非日常を感じさせるのは、見慣れてしまったマスク姿と、あいさつ代わりに"ワクチン打った?"だ。

ワクチンについてはいわゆる、賛成派と反対派、信じる派と信じない派がおって、接種が始まった頃は意見が分かれ、危うく人間関係も真っ二つに割れるところやった。日本人は議論が苦手と言われるように、自分と違う意見や考えを持った人を"敵"に近い感覚で見えてしまう。自分と全く同じ考えの人なんて存在するはずもない。どちらも間違いじゃないし、どちらの考えがあってもいい。ワクチンを接種した人の中には、打ちたくなかったけど周りの目が気になって打った、打たせた。っていう人もおって、なんとも言えん気持ちになった。

人は基本的に自分の信じたいことしか信じん。ワクチンに効果があると信じたい人はそう信じるし、害があると信じたい人はそう信じる。どちらも間違いじゃない。どっちの意見もあっていい。お互いの意見を尊重し、認め合える世の中であってほしい。私たちが今戦うべきは目に見えないウイルスで、傾いた経済や教育の遅れを取り戻すためにも、お互いを認め合いながら大変な今を手を取り合って乗り越えていきたい。

今年も残すところあとひと月。迎える新たな年はこれまでの辛抱が報われる1年となりますように。笑う門には福来る。少し早いですが、皆さん、良いお年を。

(テノヒラkiku)



本日！海日和！！ vol.133

「海のクリスマスツリー」

クリスマスソングの流れる季節となった。我が家でも、子どもが小さい頃にはクリスマスツリーを飾ったものだが、成長してからは物置の底でほこりをかぶっている。

海の中にもクリスマスツリーを連想させるものがたくさんある。スナイソギンチャクもその一つだ。名前の通り砂地に住んでいるイソギンチャクだ。海底の砂の中に体を固定し、触手を四方八方に漂わせている。この触手が獲物の魚を捕らえる道具だ。魚がうっかり触れると毒針が発射され、動けなくなってしまう。動けなくなった魚を、触手を器用に使って体の頂上にある口まで運び、ゆっくりと飲み込んでいく。毒は強く、人間にも害を与える。素手で触れると赤くはれてしまい、しばらく痛い思いをする。



【スナイソギンチャク】

今回の撮影では、ストロボの一台をスナイソギンチャクの後ろに設置してバックライトとして強く発光させてみた。少しは幻想的な雰囲気が出ているだろうか。海底のクリスマスツリーは、砂をかぶりながらも力強く生きている。

(撮影地:瀬の浜)

愛南サンゴを守る会 ともてる 西尾知照